

VECCS & CSU report

獣医師（2年目） 滝沢 玲

去る9月、12日間にわたる海外研修（VECCS参加とCSUにおける実習）を行う機会に恵まれました。そこで得られた知識・経験ならびに諸先生方から受けた刺激を、今後の診療や院内環境にどう生かしてゆくかを乱筆ながらしたためたいと存じます。

VECCSでは早朝から様々な講義に参加させて頂いた。その中でまず感銘を受けたのはVT向けの講義のレベルの高さである。VECCSに参加しているVTが高度な内容の講義を十分に理解し、診療に役立てようとしている姿に大いなる刺激を受けた。VTの養成・継続教育が高いレベルで行われているアメリカの獣医療界を肌で感じ、日本の獣医療もアメリカで行われているこのような教育をモデルケースとして発展していく必要があると痛感した。

講義の中で特に印象に残ったのは、エマージェンシー時の抗生剤・輸液の使用法や、高圧酸素療法についてである。

抗生剤については敗血症などの緊急時に最新の知見に基づいた症例ベースの使用マニュアルが確立されていることに感動した。さらに、輸液に関してはショックドーズで治療後の心臓・全身循環状態の評価についてアップデートできたことは救急医療に携わる身として大きな財産になった。また、高圧酸素療法など人医療で用いられている治療や設備を積極的に取り入れている点は日本に比べて明らかに進んでいると感じた。

このように、高度医療が浸透しているアメリカでも全ての口演者が口を揃えて **physical examination** の重要性を説いていることに深く感動すると共に、日々の診療における適切な **physical examination** が必要不可欠であるということをも再認識した。

CSU の研修では Dr. Rosychuk、Dr.Orton、Dr.Smeak、Dr.webb をはじめとした教授陣にとってもよくしていただき、3 日間で皮膚科、内科、軟部組織外科、心臓外科を見学した。

心臓外科では Dr.Orton の三尖弁輪縫縮術の貴重な手術を拝見させていただいた。アメリカの獣医療のレベルの高さに驚嘆するとともに、日本の獣医療のレベルを上げるために我々が日々努力を重ねる必要性を痛感した。

内科、皮膚科では日本に導入されていない新薬を使った最先端の治療を行っていると同時に従来の治療を確実にしている姿が印象的であった。

CSU で最も感銘を受けたのは学生の教育システムである。CSU の診療現場ではまず学生が問診をとり、鑑別診断を挙げた上でレジデントとディスカッションをするという形式であった。日本の大学のそれとは大きく異なっており、このシステムがアメリカの獣医療を発展させたといっても過言ではないと感じた。毎回の診察で学生が熟慮する事で、臨床の獣医師として育っていくというアメリカの大学病院の現場を肌で感じ、日本の獣医療の教育現場の在り方に危機感を覚えた。

また、アメリカのレジデントシステムは日本に是非取り入れたいシステムである。日本でも専門医の育成が必要とされており、大学病院と連携しつつ専門医を育てていくシステムによって日本の獣医療のレベルが上昇する事は間違いないと感じた。院長が常日頃からおっしゃっているように、我々も常に専門家集団を目指し、精進していくことが求められていることを今回の研修から再認識した。



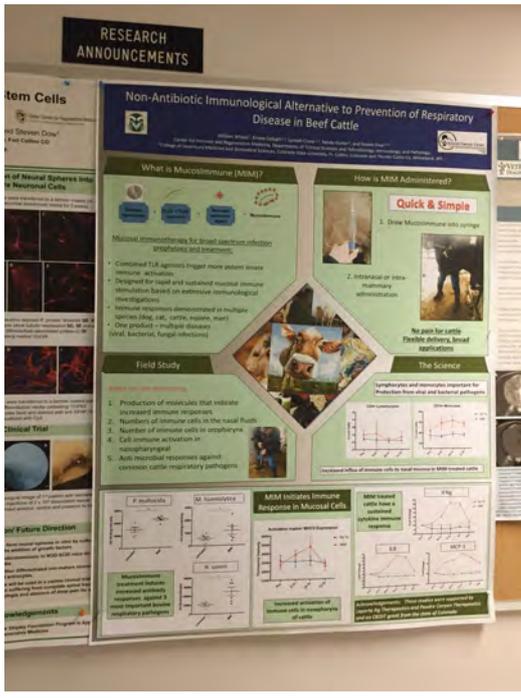
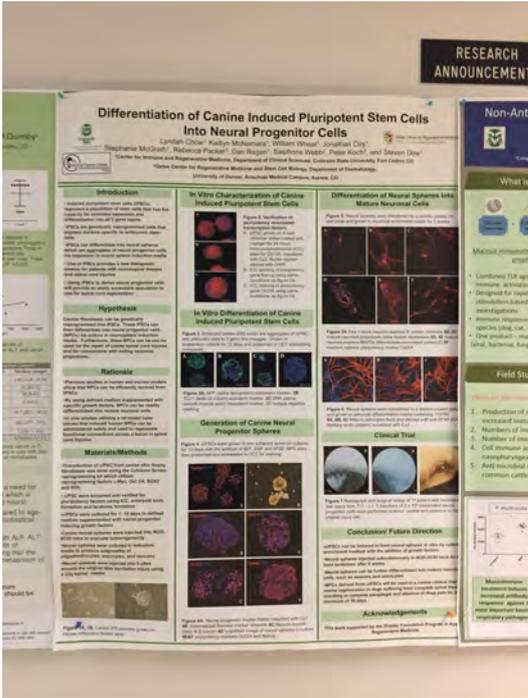
CSU VTH の診察室



院内・手術前室



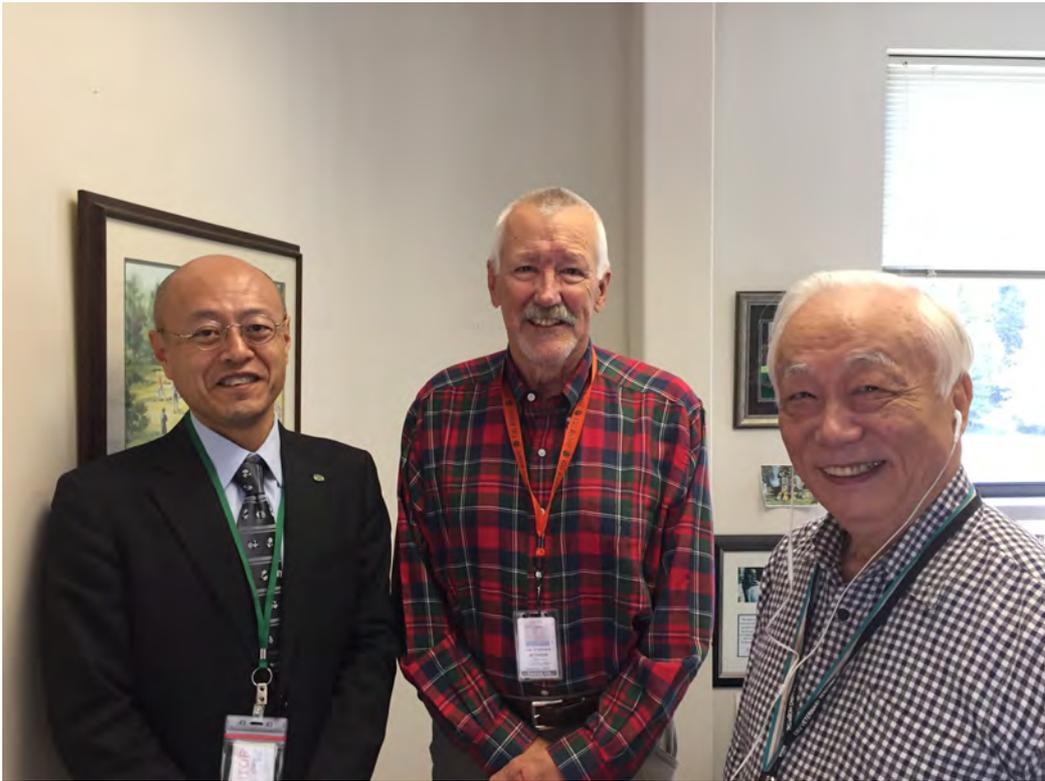
Dr.Orton と共に



研究結果



Dr.Rosychuck



Dr.Withrow



Dr.Tracey Jensen と CSU VTH 正面にて